

BATTLE BALLER

HARUKA

II-5

正体

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第二集

星間戦争

第5章

正体

作・ Ψ (Eternity Flame)

「...まだ戦るのか？」

「フン。一度まぐれで勝ったくらいでいい気になるなよ！」

秀樹の言葉にジャギは含みのある言葉で返した。すると、パーピリオン星人達の三体の機体が寄りあい、眩しい光を放ち出した。

「これぞ我らが最強の証し、トリプルトランスアソシエイト

(三大神獣覚醒交信波(さんだいしんじゅうかくせいこうしんは))だッ。」

三体が強い光を放ち終え姿を現すと、ボロボロになっていた筈(はず)の装甲(そうこう)が三体とも元通りに復元されていた。そして、飛行形態となったそれらは、機体上部に光り輝く大きな槍を搭載(とうさい)していた。

「フハハハ。どうだ！これぞ我らが科学の力だ。」

振り出しに戻るところか、内力を浪費したはるか達にとっては、大変、不利な状況になったんじゃないかと言わんばかりに、ギエンが声高らかにそう述べた。

「ハハハ。さっきの礼をさせて貰(もら)うぞ！！」

ジャギがギエンの言葉に続く。

「そうだ！このディハインクライム(三獣神槍撃(さんじゅうしんそうげき))

の餌食(えじき)にしてくれるわッ。」

二人の自信に勢いを盛り返したダイキがそう言い、高圧的な態度に出た。

「それがどうした。」

ジャギ達の姿を見て、恐れをなすのかと思いきや、秀樹は平然とそう言っただけだ。

「何！？貴様、絶望(ぜつぼう)して頭がおかしくなったのではあるまいな。」

ジャギは、秀樹が強がっているようにしか見えないでいる。

「思い上がっているのはお前達の方だ！俺達がお前達に手こずっていたのは、お前達の能力が未知数(みちすう)だったからだ。今、それを証明してやる。」

「何だと？」

「分かってねえ～なあ。アンタらは自分らの力を過信(かしん)し過ぎてるって

コトだよ...オレ達に同じ技は通じない。その槍みたいなのも使わせねえよ！」

目立ちたがり屋の正友が、ここぞとばかりに会話に割り込んできた。ジャギ達が秀樹達の目を眩(くら)まし、自分達の力を回復している間。それを秀樹達も指をくわえて見ていた訳ではない。三人がそれぞれの特性を出し合い、ジャギ達を倒す技の根回しを行っていた。

「準備は整った...行くぞ！！」

「うん！！」

「あいよ！！」

秀樹の号令一下(ごうれいいっか)、三人がオーラを最大限に引き出すと、湿(しめ)り気(け)を帯(お)びた風の流れが一瞬にして沸(わ)き起こった。

「コスモクライシス（宇宙開闢(うちゅうかいびやく)）！！」

三人が声を揃えてそう言い放つと、風はぐんと勢いを増した。

「な、何だ...こ、これは！？」

秀樹達の起こした湿り気のある風は、じきに台風のような勢いとなり、その荒れ狂う暴風の真只中(まったくなか)に呑み込まれたジャギ達の機体は、どうにも一ヶ所(いっかしよ)に踏み止まれず、かと言って逃れる事もできないでいた。

それは、間もなくして三体の神獣に平行感覚を完全に失うほどのめまぐるしい回転を与え、更にそこに風と炎と水から成る、三種のカマイタチのような刃が無数に襲い始めた。三半規管(さんはんきかん)が崩壊しそうな激しい遠心力の渦の中、ジャギ達はせめて機体の損壊だけでも防ごうとしたのであったが。

「ぐわああ...ケ、ケイオスインセクターの...き、機体が...言う事を聞かん...!？」

凄まじい暴風の起こす力と、そこに含まれる豪雨(ごうう)のごとき斬撃(ざんげき)を前に、気流からの脱却はおろか、機械の再生も思うように作動せず、ダブルの衝撃(しょうげき)にジャギは悶絶(もんぜつ)した。

「な、ピラミッドフォース...も使...えん...ぐわああー...!？」

強力な電磁波(でんじは)らしき物も、激しい暴風と山と湧(わ)く斬撃の強襲(きょうしゅう)に、張り巡らす事さえ叶(かな)わない。

「我が鉄壁(てっぺき)の甲羅(こうら)がああー…」

キラカーリングが甲羅の中にその身を閉じ込め、一番長く永らえたが、相次ぐ斬撃による被弾(ひだん)の嵐が、堅い甲羅さえもバラバラに砕いてしまっていた。暴風の中心にいるはるか達は、ちょうど台風の目の中に入っているのと同じ原理で、ほとんど風の影響を受けていない。

「トドメだ！！」

正友がそう言うと風が止み、ジャギ達の機体が同一線上(どういつせんじょう)に横一列(よこいちれつ)の状態(じょうたい)で並んだ。

「メノラバスター（聖三叉印証断空波(せいさんさいんしょうだんくうは)!!)」

そうはるかの言ったレッドクラウンを先頭に、三体のケルビムが三角形の編体(へんたい)を組み、ドライブモードで螺旋(らせん)を描く。互いの力を取り込みあいつつ、ジャギ達の機体に接近すると、それぞれが三つ編状(みつあみじょう)に絡み合ったオーラを柵引(たなび)かせながら三方向に枝分かれした。

そして、標的(ひょうてき)の寸前でそれぞれがナイトモードに変形し、手に刀や槍をそれぞれに持つと、加速した勢い(せい)を利用し思い思いに自分の標的(ひょうてき)を斬り裂(さ)き貫いて行った。はるか達のケルビムがジャギ達を粉碎(ふんさい)した軌道(きどう)を辿(たど)ると、絡み合う三色が融けあう事で描かれたオーラの軌跡(きせき)が、めまぐるしく彩りを変えながら滞留(たいりゅう)し、まるで巨大なメノラーの絵(え)が宇宙空間(うちゅうくわん)に刻まれているようであった。

それは、さながらナスカの地上絵(ちじょうえ)のように壮大(そうだい)で、且(か)つイルミネーションのように華やかな色合い(しきあい)で、虚空(こくう)の世界(せかい)を美しく彩(いろど)った。

「勝ったのね…。」

「ああ…俺達の勝ちだ。」

はるかの言葉(ことば)に秀樹(ひだき)がそう言って頷くと、メノラーの軌跡(きせき)が消え、静寂(しじく)が包む元の空間(くわん)となった。そこにジャギ達の姿(すがた)はなく、はるかは勝利(しょうり)を確信(かくしん)した。

「フッフ...なかなかやるではないか。」

その余韻(よいん)に浸(ひた)る間もなく、どこからともなく声が響いてきた。

「誰ッ!？」

レッドクラウンを身構えさせると、得体(えたい)の知れない声の主に向かい、はるかがそう呼びかけた。静かな宇宙空間に、異様(いよう)な圧力が加わったかのような緊張感が充満(じゅうまん)しだした。

「なんてプレッシャーだ...。」

その圧力に正友が冷や汗を流し、そう言った。辺りを警戒(けいかい)するはるか達。その殺気立(さっきだ)つ警戒(けいかい)の視線(しせん)を意にも介(かい)さず、敵らしき影が、はるか達の真正面から現れようとしていた。真空(しんくう)に立ち込め出した巨大な陽炎(かげろう)。やがてそれは巨大な漆黒(しっこく)の闇(やみ)となり、はるか達の視界から星々の瞬(またた)きを覆(おお)い隠(かく)した。

「デケえな...この闇。どうする、秀さん？」

「...しばらくは相手の出方(でかた)を見るしかあるまい。」

不穏なる闇から光が射し、その眩(まぶ)しさに意表(いひょう)を突かれたはるか達。光が消え、視力を取り戻すと、巨大なイカのような物体が目の前に現れていた。

「デカッ!？なんじゃこりゃ？」

その大きさに驚いた正友。いびつな姿にド肝(ぎも)を抜かれた様子であった。

「お前がポモプンか？」

しばしの沈黙(ちんもく)から秀樹が巨大なイカのような物体に、そう話しかけた。

「いかにも。余がパーピリオン星人が王、ポモプンじゃ。」

王としての気位(きぐらい)の高さからだろうか。ポモプンは、秀樹の言葉を待っていたかのように即答をした。

「お前の部下らしき奴らは俺達が倒した。次はアンタが相手をしてくれるのか？」

「いかにも。」

「それで誰と戦(や)るんだ？」

「三人まとめてでも構わんぞ。」

“王”と名乗るポモプンは、先に戦ったジャギ達よりも更(さら)に強気(つよき)な発言をした。

「なんだと!!」

その挑発的(ちょうはつてき)な態度(たいど)に正友が怒りをあらわにした。

しかし、その高飛車(たかびしゃ)にも思える態度は決して傲慢(ごうまん)などではなく。確かな実力を持つがゆえの自信と見た秀樹が、正友を静止しようとしたのだが―

「待って！」

はるかが先に仲裁(ちゅうさい)の言葉を発(はっ)していた。

「ポモプンさん！」

「何であるか？」

「もうこんな戦いは意味がないわ。あなたの仲間は自分達を究極の生物と言
ってた。そうでしょ？」

「いかにも。」

「だったら…」

「これ以上、何を望むのかとでも言いたいのか？」

はるかの話を最後まで聞かずして、ポモプンがそう結論を先に述べた。

「…そうよ。そこまで分かってるなら、わたしが何を言いたいのか分かって
くれるでしょ!？」

「余に分からぬ事などない。つまりは戦いをヤメよと言うのであろう？」

「…そうよ。」

「残念だが、それは出来ぬ相談だ。」

無駄(むだ)な争いをしたくない一心(いっしん)で、はるかは精一杯(せいいつぱい)丁重(ていちょう)にポモプンを立てながら言葉を選んだつもりであったが。あっさりとポモプンに停戦(ていせん)を断られた事により、その努力は徒勞(とろう)に終わってしまっていた。

「どうしてッ？」

「お前達に戦う理由がなくとも、余(よ)にはあるのじゃ。」

心痛な面持(おもも)ちで呼ぶはるか。その思いも、ポモプンには届かない。

「お前達、知りたくはないか？」

ポモプンが意味深(いみしん)な発言をした。

「何の事だ？」

自分の主張が聞き入れられず、肩を落とすはるかに代わり、秀樹がそう言って話しをし始めた。

「我(わ)がパーピリオン星人と、お前達人類との関係よ。」

「ほう～それは聞いておきたい物だな。」

「地球は余の玩具(がんぐ)じゃ。お前達人類の命運(めいうん)も我らが気分次第よ。」

「ダークエンジェルズという組織は、その遊びの為に作りあげた組織なのか？」

「そうじゃ。お前達が嫌がる戦争や紛争(ふんそう)もその多くは、余が仕組(しく)んだ物。ダークエンジェルズなどはその玩具の一つに過ぎん。」

「ゲーム感覚で楽しむ為なのか？」

「フフフ...いかにも。今、余を倒しておかねば、もっと大きな悲劇(ひげき)が起こるぞ！それでも戦わぬと申すか？」

ポモプンはいたって冷静に、恐ろしい事を言っただけ。その事実を耳にし、愕然(がくぜん)とするはるか。

「...言葉も出ぬか。だが、いつまでも迷ってばかりもおれぬのではないか？」

地球に迫りくる隕石(いんせき)。それが接近している事を、ポモプンの言葉が示していた。戦いを前にし、その落ち着いた態度は憎(にく)らしく映ったが。反面(はんめん)、何事(なにごと)にも動(どう)じない実力があるからこそ、そういう風に振る舞えるのだと秀樹は思い、頭にはきいていたが、今は静かに話しをしようと努(つと)め。同じように怒り心頭(しんとう)の正友を静止させた。

「地球がどうなろうと余はどうでもよいのじゃが...どうする？」

「ちょっと待ってくれ。さっきお前は、自分には戦う理由があると言ったが、その理由とは何だ？」

秀樹が質問した内容は、ただの時間稼(かせ)ぎではなく、ちゃんと意味があった。

「お前達に話す理由はない。」

「“女帝”と関わりがあるんじゃないのか？」

はるかとは正友には、秀樹が何を言ってるのか理解ができない。

「お前、何故(なぜ)それを...!？」

「...やはりな。」

「秀さん、ソレどういう意味なんだ？」

あれだけ堂々(どうどう)としていたポモプンが、わずかだが動揺(どうよう)したのを見て「ざまあ見ろ」と言わんばかりの顔で正友が秀樹にそう語りかけた。

「究極(きゅうきよく)の生物とか何とか言ってるが、アンタひょっとして

“女帝”に頭が上がらないんじゃないのか？」

「何ッ!? 貴様、何を根拠(こんきよ)にそんな事を言っておるのだ!!」

「お前達の断片的(だんぺんてき)な話と、今まで起こった事から推測(すいそく)

しただけだが、そういう解釈(かいしゃく)をすれば話のつじつまが合う。

お前は自分がさも地球を影で操り、ダークエンジェルズはその傘下(さんか)の

1 セクションでしかないように言うが。実際はそんな一傘下にしか過ぎない

所だというのに、まともに支配できていない。それが証拠に、チャン・リン

シャンと戦った時の敵は、全てがお前の指図(さしず)では動いておらず、

“女帝”の指示や入(い)れ知(ち)恵(え)で動いていた。違うか？」

「“女帝”という存在が我々の支配下にあるとすれば関係あるまい。そう思わぬか？」

「それはあり得ないな。」

「何故そう言える？」

「その“女帝”という存在を俺が知っているからだ。そして、はっきり言える

事は、その“女帝”は俺達よりも断然(だんぜん)に強い！つまりはこうだ。

お前は、究極の生物として純粋に実戦を楽しみたいと言った。なら、俺達と

戦うより“女帝”と戦う筈だ。にも関わらず、そうしていないというのはおか

しいと思わんか？」

「ぬぬぬぬッ...。」

「そこから導き出される結論はこうだ。お前達は“女帝”と一度は戦ったが敗れた。そこで他に強い奴らと戦って力をつけ、リターンマッチをしようとしている。そうじゃないのか？」

「く、くくくく...。」

「お前達は“神”でも究極の生物でもない。だが、プライドだけは高い奴らのようだな。」

「おのれ...言わせておけば...!!」

秀樹の推測(すいそく)はよほどの的を得ていたのか、はたまた侮(あなど)られたのが主としての自尊心(じそんしん)を傷つけたのかは定(さだ)かにはならなかったが、ポモプンはかなり憤慨(ふんがい)している。

「余が“女帝”より弱いかどうかその身で確かめるがよいわッ!

ゆけ、Zーランディよッ!!」

Zーランディの巨大な十本の腕が一斉(いっせい)に伸び、はるか達三人をバラバラに引き離した。

「オレが戦る!!」

正友が単独でZーランディへと突っ込んで行った。

「あッ!?正友...」

「待て、はるか。」

はるかが駆けつけようとしたが、それを秀樹が引き止めた。

「ここはひとまず様子を見よう。」

「でも...」

「いざとなったら俺が行く。」

秀樹には、何やら考えがあるようだった。

「スカイディッパー（鱗勁刃）!!」

「フッ...そのようにチャチな刃で余に向かってくるとは、片腹(かたはら)痛いわ!!」

「チャチかどうか受けてみろッ!!」

銀竜が錐揉(きりも)み状に回転しだした。

「土竜青嵐(どりゅうあおあらし)!!」

銀竜の刃はZーランディの十本の腕をズタズタに引き裂き、たちまちの内に胴体(どうたい)へと迫った。

「オラァーッ消し飛べ!!」

「消し飛ぶのは其方(そなた)じゃ!!」

どす黒い霧がZーランディに迫ろうとするに従って濃くなり、銀竜の動きを鈍くさせてしまっていた。

「こ、これは!?!」

「ダークマター（暗黒(あんこく)物質(ぶつしつ)）。宇宙を構成する超物質の一つを召喚(しょうかん)した。」

銀竜に注ぐ内力を最大にし、エンジンを全開にしたのだが、もがけばもがく程にダークマターがまとい付き、どうにも脱出できない。

「く、くそッ...抜け出せない...!?!」

「死ねッ!!」

Zーランディは、ダークマターを超高密度に圧縮(あっしゅく)した物を、ビームのように口から吐き出した。

「パーピリピリャパニャペモブンカ

（高濃縮暗黒破壊光線(こうのうしゅくあんこくはかいこうせん)）!!」

底なし沼(ぬま)に落ち込んだように動けない銀竜へ向け、放たれた光線。同じダークマターだが、色の濃度で光線の方が大分濃い。銀竜の動きをここまで止めてしまっている方のダークマターだけでも力は凄いの、その上に圧縮され激しく飛び出した光線状の物を喰(く)らえば、一体どうなることなのだろうかと思友は肝を冷やした。

しかし、逃げる事もできず、凄(すさ)まじい勢いで向かってくるダークマターを黙って見ているしかなく、僅(わず)かな時間をすごく長く感じていた。

「スプレットフライフィッシュ

（群泳飛魚雷迅弾(ぐんえいとびうおらじんだん)）！！」

ラグナクエストの援護(えんご)で、何とか束縛(そくばく)から逃れた銀竜。ぎりぎりのタイミングで、Zーランディの放った光線を躲(かわ)す事ができた。

「危なかった...。」

「しっかりしろよ、正友！」

「ああ、サンキューな秀さん。」

「アイツはさっきまでの奴らと違い、八大心拳の使い手だ。油断するなよ！」

「ああ...分かった。」

秀樹と正友が話しをしている内に、Zーランディは切り刻まれた腕を回復させていた。

「二人がかりで来るのか？」

ポモプンは余裕そうな顔をして、そう言った。

「ふん、今のは油断したが、今度は本気で戦ってやるぜッ。」

「ならこっちも本気を出させてもらうぞ！」

正友はオーラを銀竜の囲りに発動させ、ダークマターを警戒(けいかい)した。先に不用意(ふようい)に突(つ)っこんだ事への反省から、無理に動こうとはしない。

「来ぬのなら余が攻撃するぞ。」

ダークマターの高圧縮光線を吐き出すと、銀竜の頭上へとZーランディが翔(か)け昇った。関節(かんせつ)や骨のない軟体動物(なんたいどうぶつ)特有(とくゆう)の腕が、様々な方向から銀竜を襲(おそ)う。

「当たらねえよ!!」

予測不能(よそくふのう)なZーランディの腕の囲みを、銀竜はすり抜けていった。

「これはどうだ！」

ポモプンがそう言うと、Zーランディの腕の吸盤(きゅうばん)が、いきなりスカイディッパーのような刃となり、銀竜のボディを掠(かす)めた。

「うわあーッと...やべえ!!」

戸惑(とまど)う正友。銀竜がバランスを崩(くず)した。

「フハハハッ。死ねッ!!」

Zーランディの腕が、隙(すき)の生じた銀竜の死角(しかく)から一気に襲いかかったが、レッドクラウンがその危機(きき)からサンフレアビュートを使って救った。

「も一何やってんのよ！危なっかしくて見てらんないわ。」

「ハハハ...すまん。でも、アイツ強えぞ。」

その言葉を聞き、ポモプンが得意満面(とくいまんめん)な笑みを浮かべた。

「余の強さが分かったようだな。」

「ああ。でも何でそんなに強力な内力を持ってるんだ？」

正友が自分の強さを認めた事に気分を良くしたポモプンは、流暢(りゅうちょう)に理由を語り出した。

「ダークマターは宇宙中を漂い溢(あふ)れておる。それら全てを余は思いのままにできるのじゃ言わば宇宙を統(す)べるも同じ。今からそれがどういう事か教えてやろう。」

Zーランディの指さした方向。はるか正友がその方向を見ると、さっきコスモクライシスを喰らい、壊滅したジャギ達の機体の残骸(ざんがい)が漂っていた。

「ポモプン様、お助け下さい。」

その残骸から、ジャギ達の声が響いてきた。大海原(おおうなばら)で船が難破(なんぱ)し、助けを求める漂流者(ひょうりゅうしゃ)のように何もできない様子で、その姿は哀(あわ)れに映った。かろうじて命は助かったが、徹底的に機体を破壊されたので、どうやら修復(しゅうふく)できないようであった。

「おろか者めッ!!お前達にもう用はない。」

「そんな...お助け下さい。」

「余の糧(かて)となるがよい。」

「ひいいい...!!」

ポモプンがそう言うと、Zーランディがジャギ達を機体の残骸ごと呑(の)み込んだ。泣きすぎるジャギ達の声が飢(こだま)し、やがて消えると、はるかは頭を抱えこんでしまった。

「ひどい...。」

「ハハハハッ最高の褒(ほ)め言葉じゃ。」

情など下等な生物が持つ物と言わんばかりに、はるかの言葉に喜ぶポモプン。その光景を黙って見ていた秀樹が口を開いた。

「なるほど...それがお前の力の秘けつか。ダークマターを使い、あらゆる力を取り込む。ゲスな野郎に相応(ふさわ)しい力だな。」

「フッ。何も殺すことはないと言っても言いたいのか？あんな者達などいくらでも

変わりはおるわ。見るがよい！」

ポモプンがZーランディを操り、巨大なダークマターの渦を宇宙空間に築くと、数十体の物影(ものかげ)が現れた。

「こ、これは...!？」

大概(たいがい)の事では驚かない秀樹が、信じられないと言った感じで驚いている。秀樹が驚くのは無理もない事で、あれだけ倒すのに手こずったジャギ達の機体と同形の物が、数十体現れたのである。

「フハハハハッ。余の力の偉大(いだい)さを思い知ったか。ダークマターは宇宙の生命はおろか、全ての物質を形成する力の根源(こんげん)。余に出来ぬ事はない！」

「...お前の力によってソレを動かすのか？」

「それも良いが、ちゃんとパイロットも乗せてある。」

ポモプンはダークマターを使い、人工(じんこう)の生命体(せいめいたい)まで瞬時(しゅんじ)に作っていた。

それはまるで、金属や様々な部品を用いてロボットを組み立てるような物であり、ただそれが、ダークマターという地球人にはよく分からない未知の物質だけで構成されている点だけが違っているのみであった。それを素早く理解した秀樹は、苛立(いらだ)ちを押さえて話を進める事にした。

「さっきお前が呑み込んだヤツらは、自分達も含めて“究極の生物”と言って

たが、それは全てお前の手の平の上で操られてたってコトか？」

秀樹は、ポモプンがジャギ達そっくりな人工生命体と機体をあっさり生み出したのを見て、先に戦った者達も、実はポモプンが作り出した物であったのではと考えた上で、そういう質問をした。

「フッ...察(さ)しが良いな。そうだ！前のヤツらも余が作り出した物でしかない。」

「だが、さっき戦ったヤツらとコイツらとでは明らかに違う。それはつまり、

さっきのジャギ達は純粹(じゆんすい)な有機体(ゆうきたい)であり、今居る

コイツらはサイボーグだという事だろ？」

「いかにも。先の者達は、よその惑星から余が捕虜(ほりよ)とした者を洗脳(せんのう)したのじゃ。今、お前達の前にいる者達は、其奴(そやつ)らを基(もと)に作り出したアンドロイドよ！」

「...そんな。」

ポモプンの知能の高さにも驚愕(きょうがく)したが、それ以上に冷徹な心に、はるかは恐れを抱いていた。

「フハハハハッ。あんなチンケな者どもが究極の生物などになれる訳がなからうに。全く可笑(おか)しな物よ、フッフッフッ...。」

「あなたが洗脳して言わせたんでしょ!!」

はるかは、先程(さきほど)まで激しく戦っていたジャギ達に同情し、やりきれない怒りをポモプンにぶつけた。

「余は確かに洗脳したが、あ奴らに僅かに自我(じが)を

残しておいてやった...クックックッ...。」

「なら望まぬ戦いや言動を言わせた上で、嫌な想いをして苦しむ姿を見て、楽しんでいたという訳か？」

言葉(ことば)尻(じり)では抑(おさ)えていたが、秀樹の発言には怒りが静かに満ちていた。

「いかにも。」

そんな秀樹達の姿を見て、喜んだポモプンがそう言って頷(うなづ)いた。

「...悪趣味(あくしゅみ)なヤツめ!!」

「余は神。余が何をしようと、誰も裁(さば)けぬし、誰も拒(こば)めぬ...

フッフッフ...ハハハハハッ！」

「なら俺達がお前を裁いてやる！！」

秀樹の一言に、はるかとは正友も敏感(びんかん)に反応し、ケルビムを身構(みがま)えさせると臨戦体勢(りんせんたいせい)を整えた。

「おっと、ゲームはこれからが本番じゃ。この数十体の神獣と、余を相手にどう戦うか見せてもらおう。」

「秀さん...どうする？」

多勢に囲まれたのが、一筋縄では行かない相手ばかりだったので、正友は秀樹にどう対処(たいしょ)すればいいのか指示を仰(あお)いだ。しかし、ゆっくりと話し合う時間を与えてはもらえず、ポモプンが一斉攻撃を開始させた。

12体ずつ現れた、キラーカーリングとファラオスフィンクスとケイオスインセクター。それらの相手をするのは簡単ではなかったが、人工知能の指示での動きには、さっきまでの戦いほどの冴えは感じられず、最初は数に圧倒されていたはるか達も、次第に慣れてきていた。

「さっきの奴らより反応が遅(おそ)いから、いくら数で攻めようとしたってへっちゃらだぜ！」

「そうね。確かにさっきに比べれば、“神獣もどき”にもならないわね。」

はるかとは正友の会話にも余裕が伺(うかが)えた。

「フン、ならこれは躲(かく)せるか？」

ポモプンはそう言うと、Zーランディの腕を最大限に撓(しな)らせ、大技を打つ構えを見せた。はるかとも正友も用心(ようじん)したが、その注意も役に立たない予想外の攻撃をされてしまった。

レッドクラウンと銀竜を、それらを取り囲む神獣もどき達ごと叩(たた)きつけたのである。神獣もどき達の影が死角となり、二人は目測(もくそく)を誤(あやま)った。

「ぐわあああああ...!!」

「きやあああああ...!!」

銀竜とレッドクラウンがバランスを崩し、強力なGと揺れに苦しむ、はるかとは正友。横転(おうてん)する二体のケルビムは、Zーランディの腕に拘束(こうそく)されてしまった。

「く、ヤバイ...!!」

「ぬ、抜けられないわ。」

はるかとは正友はケルビムを脱出させようとしたが、すぐとは無理な口ぶりであった。

「フッ。やっと捕えたぞ！死ねッ!!」

ダークマターを圧縮した光線が、Zーランディの口から再び発しようとしていた。殺意(さつゐ)を漲(みなぎ)らせた台詞(せりふ)をポモプンが言い終えるや否やそれは放たれたが、ラグナクエストを翔けさせた秀樹が、はるか達を救い出していた。

「お前は俺達三人を相手してる事を忘れるな！倒そうと言うのなら、三人同時に捕まえねば勝てんぞ。」

「フッ。次はそうするでしょう。」

「次はない。」

「何だと!?この期(ご)に及(およ)んでまだ強(か)がりと言うか？」

「強(か)がりなどではない。」

秀樹の言葉は嘘(うそ)をついているそぶりは見えない。

「お前は膨大(ぼうだい)な力を有(あ)してはいるが、その膨大(ぼうだい)な力を有効(ゆうこう)に使(つか)えていない。今からそれを証明(しょうめい)してやる！」

秀樹がそう言うとき

「ユニオンフォース!!」

と、はるかが叫んだ。それは何かの作戦名なのだろうか。ポモプンはその言葉を耳にするなり、落ちつきを失くした。

「貴様(きさま)ら何をするつもりだ!？」

嵐(あらし)の前の静けさと言うか、はるかが“ユニオンフォース”という言葉を使い終えた直後、静かな宇宙空間(うちゅうくうかん)が、なお一層(いっそう)静かに感じになり、その静寂(せいじゃく)がポモプンには気味悪(きみわる)く感じられ、思わずそう叫んでいたのだが。ほどなくして、その不安は現実(げんじつ)の物となる。

「レッドセラフィム（聖紅熾天使(せいこうしてんし)）!!」

はるかときと正友(ただとも)と秀樹(ひでき)の三人(さんにん)が呼吸(こそ)を合わせると、互いのケルビム(ケルビム)が合体(くわたい)し、大きな一体(いつたい)のケルビム(ケルビム)となった。レッドクラウン(レッドクラウン)を倍(2)くらいにしたような色合い(いろあひ)とフォルム(フォルム)をしていて、はるかが主(しゅ)だって統率(とうそつ)しているような感じが外観(がい観)からは漂(ただよ)っていた。

ただし、さっきまでの瞬敏(しゅんびん)さを重視したかのような華奢(きゃしゃ)なボディとは違い、力強さが格段に増している格恰(かつこう)をしていた。その重圧を敏感に感じ取ったポモプン。言い知れぬ不安は、正にこの事を予知していた物である事は言うまでもない。

一気に集約された力が融合して激しく反応する躍動(やくどう)を肌で感じるに至り、ポモプンの不安は恐れに変わっていた。

「な...なんだ!?この力は...?」

「これが力を合わせるという事よ!あなたは自分以外の者を巧(たく)みに操る事はできても、協力するという事を知らない。私達三人の力を見せてあげるわ!!」

ポモプンの問いかけに、はるかはそう答えると、レッドセラフィムに弓矢を持たせた。

「覚悟(かくご)しなさいッ!!」

「おのれーッ。余を愚弄(ぐろう)するか...者供(ものども)、かかれ!!」

数を頼(たよ)りに、Zーランディと数十体の神獣が、レッドセラフィムめがけ一斉に砲撃したが、なぜかレッドセラフィムは躲(かわ)そうとしなかった。

「どうだ!逃げられまいッ。」

その姿を見て、さっきのはるかの自信はハツタリだと思ったポモプンは、そう言って勝ち誇(ほこ)ったのだが...

「逃げるまでもないわッ。」

「何ッ!?!」

全砲撃(ぜんほうげき)が命中し、黒煙(こくえん)に覆(おお)われたレッドセラフィム。しかし、黒煙が消えた中から出てきた姿は、傷一つ付いていなかった。

「な、何故だ!?!」

「ヘヴンリーエアロ。レッドセラフィムは、強力な内力で練(ね)られた防御壁(ぼうぎょへき)に護(まも)られてるのよ。だから、そんな攻撃ではカスリ傷ひとつ与えられないわ!」

「くっ...。」

「次はこっちの番ね...行くわよッ。」

レッドセラフィムの手にした弓に矢がセットされ、Zーランディへと放たれた。

「パラダイムレッドカーレント

(天衣無縫火炎豪弓撃(てんいむほうかえんごうきゅうげき))！！」

矢じりがメノラーの形をした無数の矢が、神獣の群れを風が塵(ちり)でも吹き飛ばすかのように、軽々と一網打尽(いちもうだじん)にしまった。

「くっ...なんという力じゃ...。」

「さあ、次はあなたの番よ!!」

はるかがそう言うと、レッドセラフィムの手から大剣が現れた。

「レッドオーブクレイモア(至高火炎剣(しこうかえんけん))！！」

大剣は燃え上がり、その高熱によって七色(なないろ)に光り輝いた。

「余は負けぬ...喰らえッ!!」

尻ごみをしていたポモプン。今までに経験した事のない強大な力に圧倒されていたが、“王”としての意地が彼を戦いへと押し出させている。

強敵との対戦は、想像していたようなスリルを彼に持たらしてはくれず、代わりに恐怖を植えつけていた。しかし、そんな弱気な感情を持つ事が、どうにも我慢できず、振り払うかのように闇雲(やみくも)に突進(とっしん)してきたポモプン。はるか達の目に、彼の姿はそう映っていた。

実際の実力の差は、勝敗が着いていない今の時点では明確ではないのだが、敗北するかも知れないという不安がポモプンに冷静さを失わせていた。その不安を抱かせたという点では、互角(ごかく)以上の力をはるか達は持っていたから、ポモプンはそうなった訳(わけ)であるが。彼が慌てたのは、常に絶対的優位な立場にしか立った事がない者特有(とくゆう)の精神的な弱みであった。

要(よう)するに気が動転(どうてん)していたのだが、ポモプンには初めての経験で、どうしているのか分からずに暴れ回っている。

案の定、その乱雑(らんざつ)な攻撃を掻い潜(かいくぐ)ったレッドセラフィムに土手っ腹(どてっばら)を大剣で斬りつけられた。

しかし、Zーランディの胴体は想像以上に弾力(だんりよく)があり、断ち切る事はできないでいた。致命打(ちめいだ)を与える事は叶わなかったが、衝撃(しょうげき)は相当(そうとう)な物であり、その衝撃が「カツ」となったポモプンの頭を冷やした。

「どう！もう降参(こうさん)する気になった？」

Zーランディの体勢を立て直そうとして沈黙するポモプンに、はるかが降参を迫った。しかし、思わぬ返事が返ってきた。

「フフフ...何を寝言(ねごと)を言っている。」

「何ですって!？」

「余にはこの絶対防御がある。三体の神獣の能力を併(あわ)せた力を更に上回る力がな。ダークマターはピラミッドフォースの様な強固なバリアにも変形し、はたまたケイオスインセクターの様に自在に硬度(こうど)や体積を変える力もある。お前達の力が予想を大分(だいぶん)上回ったので、少し取り乱しはしたがな。だが、これこそ余が求めていた戦いなのであろう。」

ポモプンは頭の中を切り換(か)え、五分(ごぶん)の戦いに臨(のぞ)む決心(けっしん)をかためる事で、敗北するかも知れないという後ろ向きの感情をあっさりと拭(ぬぐ)い去(さ)り、スリルを楽しもうとする姿勢(しせい)を見せた。

生まれて初めての経験にオロオロしていたのが嘘のように、不測(ふそく)の事態にも順応(じゅんのう)できる速さは、さすがに高等生物を自負(じふ)するだけの事はある。だが、それは一人よがりの考えであると言わんばかりに、意外な返事をはるかがする事となる。

「さあ、始めようか。」

「...まだ分かってないようね。」

「何だと!？」

「あなたの力は底が見えたってコトよ。わたし達は、まだ全然本気になってないってコト。」

「フン。そんな話を誰が信じるか！！」

「さっきあなたが体勢を崩した時、わたしはあなたを倒すコトができたわ！

これでもまだ分らないの？」

「黙れっ!!」

ポモプンは鉄壁の防御を頼みに、はるかの忠告を寄せつけない。ダークマターの力が一気に膨れ上がり、共鳴(きょうめい)し合うプレッシャーが宇宙空間に響き出した。

「秘策(ひさく)を隠しておったのはお前達だけではないッ。喰らえッ！！」

断層(だんそう)が起こるが如き空間の歪(ゆが)みが起こっている感覚を、はるか達は感じた。すると、レッドセラフィムの周辺の歪曲(わいきょく)した空間に幾(いく)つもの風穴(かざあな)が空いた。

「くっ...重い...。」

「パーピリプリパラモモプンカー

(空間転送黒幽破(くうかんてんそうこくゆうは))！！」

磁場(じば)が狂(くる)い、おかしい方向から重力(じゅうりょく)らしき物や風の抵抗(ていこう)のような物を受け、その衝撃はケルビム越(ご)しに、はるか達にも伝わり動きにくさを覚えさせた。そして、歪曲空間に開いた穴からダークマターの圧縮砲が飛び出してきた。

「フハハハッ...どうだ！！」

これまでにない量のダークマターが、至(いた)る所から噴出(ふんしゅつ)し、レッドセラフィムのボディを包み込んだ。

「やったか？...。」

ポモプンはこれまでにない興奮(こうふん)を経験していた。追い詰(つ)められるという経験。自分と肩を並べると認めた相手に与えた渾身(こんしん)の一撃。その先の結果が、楽しみでならないといった様子。

ただ、そこには自分が負けるなどといった結果は毛頭(もうとう)なかった。飛散(ひさん)して大爆発をしたダークマターの黒煙が原爆(げんぱく)のきのこ雲のごとく昇り、やがて消えると、立ちつくすレッドセラフィムの影が見えだしたのだがー

「この程度では、わたし達は倒せないわよ！」

なんとレッドセラフィムは、さっきと同じく全(まった)くの無傷であった。

「な、何だと!?...そ、そんな馬鹿な...まさかあれだけのダークマターを全て躲したというのか...？」

「違うわ。あなたの攻撃じゃ、レッドセラフィムの障壁(しょうへき)は破れないってだけよ。」

「くッ...!」

「もう降参しなさい!!」

「誰に物を言っておる！！我が攻撃を防いだくらいでいい気になるなッ。まだ余には鉄壁の防御が残っておる。こうなればお前達の内力が尽きるまで、余は防御に徹(てっ)するまで。力尽きた後でゆっくり後始末(しまつ)をつけてやるわ。」

ポモプンを倒さなければ、はるか達には地球を破滅(はめつ)から救う手立(てだ)てがない。そこに付け込んだ非情(ひじょう)手段(しゅだん)をポモプンは取っていた。はるか達の攻め疲れを待ち、弱った時点(じてん)で反撃(はんげき)に移(うつ)る。

持ち前の頭脳による計算を元に、何重(なんじゅう)にも必勝(ひっしょう)の策(さく)を弄(ろう)していたのだが、これが最後の策であった。当初(とうしょ)の目的はどこへやら。形振(なりふ)りに構(かま)わず、勝利という結果だけを求めての行動に走っていた。高等生物だなんだとは言っているが、やっていることは子供じみていて、どうしても負けたくないと駄々(だだ)をこねているだけ。

秀樹の指摘(してき)した内容があっけるとするなら、こんな事をしては、いつまで経(た)っても彼（ポモプン）は力を付けられないのだが...

「くくく...どうした？早く攻めてこねば大隕石(だいいんせき)の集団が地球に向かっておるぞ。」

ポモプンがZーランディの腕で指した方角を見ると、隕石の集団が猛スピードで地球を目指しているのが確認できた。

「あれは...!？」

「あれだけではないぞ。」

はるか達の頭に、様々な隕石が四方八方(しほうはっぽう)から地球へ押し寄せている映像が浮かんだ。それはポモプンがテレパシーを使って見せた物であった。それを見て驚きもせず、はるかは険しい視線でポモプンを睨(にら)みつけると、こう切り換えした。

「つまらない茶番(ちゃばん)はやめてよ。」

「何!?...どういう意味だ？」

「あなたはこんなマネしなくても、大量に人間を殺(あや)めるなんて、その気になれば幾らでも出来るじゃない。こんな芝居(しばい)じみた事して...小細工しないで！」

ポモプンの能力やこれまでの行動を見れば、誰が考えてもそれは簡単に推測できる事であった。

「フフフ...そういう意味か。確かに余がその気になれば、核ミサイルのスイッチなど何なく操れる。ほれ、早く攻めてこんとお前達の帰る所がなくなるぞ！
フツ...フハハハハッ...」

「許せない...!!」

はるかの怒りは頂点に達し、もはやポモプンを討(う)つのに何のためらいもないといった顔つきで、迷いは無くなっていた。すると、レッドオーブクレイモアの刀身(とうしん)が激しく燃え出し、あまりにももの高熱に激しく発光(はっこう)しだした。

「レッドセラフィムの剣にヘヴンリーエアロをまとわせたわ。この一撃が決まれば、あなたはひとたまりもなく破れる。」

「やってみろ!!」

ポモプンはそう言うと、集められるだけのダークマターを集め、その中に閉じ籠(こ)もってしまった。

「どうだ！これでも破れると言うか!!」

「コスモレールガン（星間斷道銃(せいかんだんどうじゅう)）!!」

とてつもなく巨大な堅城(けんじょう)に隠れたかのようなポモプンを見て、はるかはもう一つ武器を出した。

レッドセラフィムは左腕と脇腹(わきばら)にライフルのように大きな銃を挟み込(はさみこ)むように持ち、半歩(はんぽ)下がった右半身には剣を後方に大きく振りかぶらせると、切(き)っ先(さき)を足元へ向けるように斜め一文字(ななめいちもんじ)にした状態で構えを取った。

「メキドリロード[内力装填(ないりよくそうてん)]完了！」

秀樹が三人の内力を取りまとめ、銃へとそのエネルギーを流し込んだ。すると、銃身(じゅうしん)に赤・青・銀の三色の光が灯りだした。

「f [炎]・a [水]・w [風]・・・メキドリロード[内力装填]確認。融合するぜ！」

正友が三人の力を結集させ銃の発射体勢を整えると、弾倉(だんそう)の付近がエメラルドのような強い光を放ちだした。

「コスモノヴァフレーム

[超新星大火炎光爆波(ちょうしんせいだいかえんこうばくは)]！！」

はるかがそう言うと、レッドセラフィムがライフルのレバーを引き、弾を銃口(じゅうこう)へと送った。そして、大剣を足元に突き立てると、レッドセラフィムのボディが大地に大木が根でも張ったかのように宇宙空間に固定された。

両手にライフルを構えると、引き金を引かれて発射された弾が、凄まじい反動を起こす。弾(たま)はZーランディの元へと猛スピードで弾(はじ)きだされた。

宝石のように輝く弾丸(だんがん)は、緑から一橙(だいだい)ーえんじー真紅(しんく)へと、進むごとに発色を変え、最後には純粋な光となってZーランディの籠もる壁へと命中した。

圧縮された光弾(こうだん)は標的を捉えると、様々なプリズムを放ちながら、大膨張(だいぼうちやう)を起こし爆烈(ばくれつ)をした。

「うおおおーッ...な、なんだ!?この爆発は!!」

凄まじい振動(しんどう)が、ダークマターのぶ厚い壁の内部に反響(はんきょう)し、中にあるポモプンはパニックに陥(おちい)った。

そんな大爆発の直後。地面などない筈の宇宙空間に、突き立ったレッドオーブクレイモアを逆手に持ち、素早く発進(はっしん)したレッドセラフィム。

ダークマターの壁が溶解するほどの激しい熱と光の渦(うず)に呑み込まれ、身動きが取れないZーランディに向け、大剣が振り下ろされた。

「ギルティ・ブレイク(天誅焰)!!」

コスモレールガンが放たれてから、タイムスパンのない第二波。Zーランディが得意の形態変化や離れた先への瞬間移動をする暇(いとま)も与えず、レッドセラフィムの剣は、ポモプンのケルビムを真っ二つにしていた。

「こ、こんな馬鹿な...」

「新星が生まれる時の膨大な化学反応によるエネルギー。それがこの銃による爆発の力よ。そして剣撃には、どんな物をも寄せつけない天界に漂う浄化(じょうか)の熱風(ねっぷう)を加えた。刀身にはわたし達三人の内力(メキド)を融合させ、最高の硬度を持たせてね。この攻撃には、どんな怪物(かいぶつ)だって耐えられないハズだわ!」

「く、くそ...この余が...」

その言葉を最後にZーランディが大爆発を起こし、地球へ向かっていた隕石群も共に、跡(あと)かたもなく消え去った。

「終わったのね...。」

はるかは緊張の糸が切れたのか。静けさを取り戻した宇宙空間の中でも、ひとときわ静かになっていた。

バトルボーラーはるか第二集 星間戦争
第5章・正体

<http://p.booklog.jp/book/60755>

著者：Ψ (Eternity Flame)英 樹(はなぶさ いつき)

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>

ブログ<http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集：Ψ (Eternity Flame) 秋乃空(あきのそら)

ブログ：<http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントかブログへ

<http://p.booklog.jp/book/60755>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60755>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ